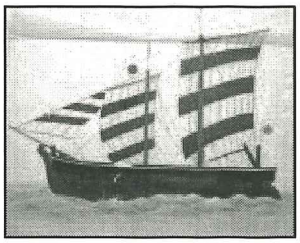
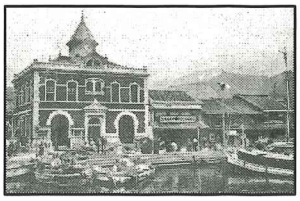
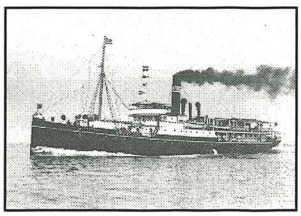
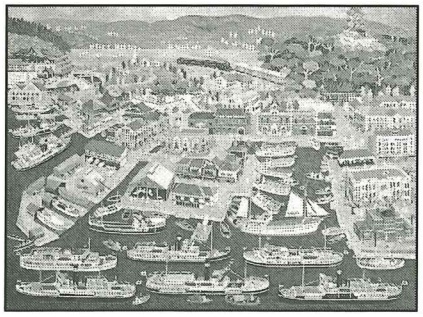
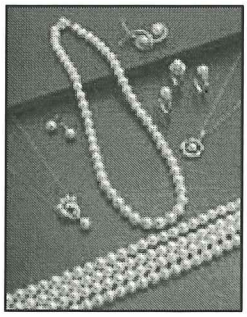
Ⅱ章　宇和島の歴史

宇和海と共に歩んだ町・・・宇和島

宇和海、主に豊後水道は内航航路の要所として知られ、これを制するものは瀬戸内海を支配するとまでいわれた時代がありました。古くは平安初期に起こったとされる藤原純友の乱に代表されるような争いもあり、西南部に位置する宇和島は温暖で豊かな自然に恵まれ**宇和海の恩恵を受けて発展してきた町**です。



宇和海は江戸時代になると畿内、中国、四国、九州を結ぶ海上交易の路線として新たに脚光を浴びるところとなりました。参勤交代により物流拠点として次第に宇和島港は港湾整備を充実し、宇和島を代表する建築物である宇和島城が、当時は海に面しており、海から見た姿が最も威厳があり、美しく見えるように造られていることも有名です。幕末八代藩主宗城の時代には、軍事の近代化を推し進め、大村益次郎を招聘し軍艦建造の研究を行わせ、藩内より登用された前原巧山は、安政 6 年（1859 年）国内 2 番目の蒸気船を完成させました。明治 2 年（1869 年）には蒸気船「九曜丸」を建造し、大坂－宇和島間の航路を達成しました。



また、宇和海ではいわし漁が盛んで、海岸部に次々に新浦が開かれ、江戸中期には「いわし網」が 163 系統もあったと伝えられています。戦後から今日に至るまで、沿岸漁業も盛んに行われてきましたが、回遊魚の減少から「作る漁業」への転換が進みました。リアス式海岸の地理条件を活かし、鯛・ハマチなどの養殖漁業が始められ、現在の宇和島を支える基幹産業となっています。もう 1 つの基幹産業である真珠養殖業は、戦時中頃から始まったとされ、昭和 29 年に地元漁民による稚貝採苗が開始、昭和 33 年頃から、地元漁民経営による本格的真珠養殖業が軌道に乗り全国有数の産地となっています。加えて、宇和島元来の特産である皮てんぷら（じゃこ天）が「宇和島じゃこ天」として商標登録され、東京の街でも、「宇和島じゃこ天」としてメニューに載せられるほど、知名度を上げてきていることも特筆すべきことです。